知恵を売った少年　インド

昔むかし、あるところに、貧しい少年がいました。両親はいませんでしたが、両親から授(さず)かった知恵がありました。とても賢かったのです。

ある日、少年は、町に出て、一番せまくて安い場所を借りて店を開きました。そして、店の上に「知恵売ります」と書いた看板(かんばん)をかかげました。少年は、一日じゅう、大きな声で、

「知恵を売ります。あらゆる知恵を売ります。お安くしときます」と呼びかけました。けれども、町の人たちは、集まってきて笑うだけで、知恵のひとかけらも買おうとしませんでした。

あるとき、金持ちの商人の息子が、少年の店の前を通りかかりました。息子は、

「ひとついくらするんだい」ときました。少年は、

「ニッケル貨(か)一枚です」と答えました。息子が、ニッケル貨を差しだすと、少年は、紙切れを取りだして、こう書きました。

「ふたりのけんかを立って見ているのは、賢くない」そして、

「わすれないように、この紙切れをターバンの布に結びつけておくといいよ」といいました。

息子が家に帰って、商人に紙切れを見せると、商人はかんかんに怒りました。

「このばかめ。こんなものにニッケル貨一枚はらうなんて。だれだって、ふたりのけんかを立って見ているのはよくないことを知っている」

商人は、少年の店に行って、しかりつけました。

「この悪党め。うちの息子をだましたな。息子はばかで、おまえは詐欺師(さぎし)だ」

少年は、

「わたしの知恵がいらないなら、返してくれてもかまいませんよ」といいました。商人は、紙切れを投げつけて、

「ほら、金を返せ」といいました。

「だめです。わたしの知恵をまだ返していません。あなたは、その紙を返しただけです。もしお金を返してほしければ、あなたの息子がけっしてわたしの知恵を使わないことを、紙に書いて渡してもらわなければなりません」

そこで、商人は、

「けんかしているふたりがいたら、いつも立って見ている」と書いて、少年に渡しました。

さて、王さまには、お妃(きさき)がふたりありました。このふたりのお妃は仲が悪かったので、お付きの

召し使いたちも、よく激しいけんかをしました。

あるとき、両方のお妃の召し使いが、たまたま、市場で出くわしました。そして、一個のかぼちゃを取りあって、けんかを始めました。そこへ、たまたま市場に来ていた商人の息子が来あわせました。ふたりの召し使いは、取っ組み合って、髪の毛を引っ張りあって、なぐり合って、大げんかをしていました。商人の息子が、立って見ていると、一方の召し使いがいいました。

「あなた、証人になってください。この人はわたしをなぐりましたよね」

すると、もうひとりもいいました。

「この人こそ、わたしを何度もなぐりましたよね。証人になってください」

召使たちは、お城に帰ると、それぞれのお妃に、市場でけんかした話をしました。それを聞いたお妃たちは、かんかんに腹を立てて、王さまに訴えました。そして、商人の息子を、証人としてお城に呼んでくれるようにいいました。お妃たちは、

「もし商人の息子が、わたしの側に立って証言しなければ、首をはねてしまいます」といいました。

商人の息子はうろたえました。商人もどうしていいかわかりませんでした。息子がいいました。

「ねえ、あの少年のところに行って、知恵を買おうよ」

商人と息子は市場に行きました。少年はいいました。

「助けてあげますが、こんどの知恵には、ニツケル貨百枚分の五百ルピーいただきます」

商人が、五百ルピーはらうと、少年は息子にいいました。

「お城に呼ばれたら、ばかのふりをしなさい。王さまや裁判官のいうことが何ひとつわからないふりをするんです」

つぎの日、王さまは、息子を呼び出しました。息子は何を聞かれても、わけのわからないふりをしました。ぶつぶつ意味のないことをいうばかりで、とうとう王さまは腹を立てて、息子を追い返してしまいました。息子は、この計略がうまくいって大喜びでした。

けれども、商人は、うれしくありませんでした。息子がいつもいつもばかのふりをしていなければならなかったからです。もし息子がだましたことが分かったら、王さまは息子の首をはねるにちがいありません。ふたりはまた市場に出かけていきました。

少年は、

「では、五百ルピーいただきます」といいました。そして、こういいました。

「王さまのご機嫌のいいときに、お城に行って、今までのことをぜんぶ話してしまいなさい。王さまは、その話がおもしろいといって許してくれるでしょう。でも、王さまが笑いたくなるような気

分のときに限りますよ」

商人の息子は、王さまのご機嫌のよいときを見はからって、今までのことを話しました。王さまは、大笑いして息子を許しました。

王さまは、知恵を売っている少年に会いたくなりました。そこで、少年を迎えにやって、まだ売る知恵が残っているかどうかたずねました。

「もちろんございます。とりわけ王さまには、たくさんございます。でも料金は、十万ルピーですよ」

王さまは十万ルピーはらいました。少年はいいました。

「何事をするにも、その前に深く考えよ」

王さまはこの知恵をたいへん喜びました。そして、この言葉をわすれないために、まくらにぬいとらせ、コップや皿に彫りこませました。

何か月かたって、王さまは病気になりました。すると、ひとりの大臣が、王さまを亡き者にしようと考えて、お医者にお金をにぎらせて、王さまの薬に毒を入れさせました。

薬が運ばれて、金のコップを口まで持ち上げたとき、王さまは、そこに彫りこんである言葉を読みました。

「何事をするにも、その前に深く考えよ」

王さまは、この言葉について考え、コップを下ろし、コップの中の薬をながめました。お医者はそれを見て、毒を入れたことがばれてしまったのだと思いました。お医者は、王さまの足もとに身を投げ出して、何もかも白状して、許してくれと頼みました。

王さまは、びっくりしましたが、すぐに我に返り、家来たちを呼んでお医者をつかまえさせました。

大臣は死刑になり、お医者は王国から追放されました。王さまは、知恵を売った少年を大臣に取り立てて、いつまでも賢く国を治めましたとさ。

村上郁再話

資料『インドの民話』A・K・ラーマーヌジャン／中島健訳／青土社